

裏話の愉しみ 加古陽

歴史には正史と裏面史があつて、たいていの場合、おもしろいのは裏面史である。正史は、歴史学者や時の権力が正しいと認定した「事実」を伝える。裏面史は、書き手・語り手の眼で見た「真実」がづらられる。中には、正史として語るのには憚られるようなエピソードも含まれる。建前ではない、本音の歴史である。

中でも出版の世界の裏面史には、興味深いものが多い。最近では、梁石日に伴走し『血と骨』を世に出した芝田暁の『共犯者』編集者のたくらみ(駒草出版)などがそうだが、短歌の世界でも昨秋、ユニークな裏面史が出た。晋樹隆彦名で本誌選者を務める及川隆彦の、その名も『編集者の短歌史』(はる書房)である。

及川は雑誌「エロチカ」などの編集を経験した後、一九七七年に短歌新聞社に入社し、八年間にわたり短歌総合誌「短歌現代」の編集にあつた。本に描かれるのは、この間の体験談である。

「短歌」と「短歌研究」に次ぐ第三の総合誌として、満を持して創刊した「短歌現代」だったが、創刊号巻頭の土屋文明の連作で「桜」を「桜」と間違つてしまい、社長が「そうだ、土屋先生は、桜の芽が好物だったよ」とうなだれた話。寺山修司の講演を収録しようとしてゲラを持って行ったら、寺山が劇団員と打ち合わせをしながら、立ったまま猛烈なスピードで朱を入れていった話。近藤芳美論の原稿を荒正人(文芸評論家)に頼んだら締め切りに遅れに

遅れ、ようやく受け取り場所に指定された高円寺駅に向かうと、荒が雨に打たれてベンチに座っていて、あとで聞いたら実は重いうつ病を患っていたという話。同僚が風の強い日に大西民子をバイクに載せて家まで送ったら、化粧がはがれて全くの別人になっていた話。塚本邦雄の作品に誤字があり、指摘したら「一生の不覚です!」と言い、詫び状とともに高級ブランドが送られてきた話。こうしたエピソードが次々に紹介される。

短歌史的に重要な話も少なくない。三枝昂之、小高賢らと「昭和十九年の会」をつくり、育てていった経緯は、三枝が会から遠ざかり、小高亡き今となっては、著者のほかに詳しく語れる人はいないだろう。長く歌壇から遠ざかっていた春日井建が父の死を受けて復帰する際、「短歌現代」に発表した連作「帰宅」をめぐると話は、既に一部出ているが、通史の中で残す意味がある。

当時の「短歌現代」は、ユニークな企画を連発していた。金子兜太と佐佐木幸綱の対談では、アニミズムをめぐる刺激的なやり取りが繰り広げられ、それぞれの後の作品に影響を与えた。寺山修司のリクエストで組んだ吉本隆明との対談も、この雑誌で初めて実現したものだ。意外にも良くかみ合った玉城徹と塚本邦雄の往復書簡も、玉城の依頼で著者が仕組んだものだった。

一時は週に四十軒も飲み歩いたという酒のエピソードなどもスパイスになり、楽しい読み物に仕上がっている。ただ一つ残念なことは、人物索引がないことである。短歌裏面史の代表的著作である中井英夫の『黒子の短歌史』もページ下に登場人物のミニ解説があるものの、やはり人物索引がない。逆引きできるようなすれば、短歌史を調べるものの手助けになっただろう。